

「シベリア・ノート」と『死の家の記録』

松 本 賢 信

§1 「シベリア・ノート」の概略的説明

「シベリア・ノート」は我が国の読者にはあまり知られていないが、これはドストエフスキイの作品ではなく、彼がオムスクの監獄に服役していたときから、セミパラチンスクで兵卒として働いていた時代にかけて記された、いろいろな意味で作家の関心を引いた種々の表現の書きつけ、いわゆるメモである。

「シベリア・ノート」と称されてはいるが、ドストエフスキイの原稿にそのような名称が記されていたわけではなく、今日残されているこの作家の覚え書類の中では最も年代の古いもので、シベリア流刑時代に書かれたものであることから、最初の編纂者によってこの名称が与えられ、それが今日に至るまで踏襲されているということに過ぎない。

個々の書きつけにはドストエフスキイ自身によって番号が付されており、一番最後の書きつけ 486 番が書かれたのは、そこに日付が付記されていて、1860 年 9 月 6 日であることははっきりしているが、一番最初の書きつけがいつ書かれたものであるのか、正確にはわかっていない。ただ、「シベリア・ノート」後半のいくつかの書きつけ（全部で 10 箇所）には日付が付されており、⁽¹⁾ そこから逆算することによってある程度の推測が可能であり、ドストエフスキイがオムスクに服役していた 1852 ないし 53 年頃に 1 番の書きつけが記されたと考えるのが最も自然であると思われる。

§2 「シベリア・ノート」の実質的記載事項数

最初に、「シベリア・ノート」の書きつけは全部でいくつあるのか、といった数量的問題を明らかにしておく。1 番に始まり、486 番で終わっているのも、単純に 486 個と考えるのが自然であるが、実際にはそうになっていない。というのは、38 番と 53 番が *Переменял участь*. (脱走, 逃亡を意味する囚人用語) という全く同じ表現なので、一つと数えねばならないし、その他にも、375 番の表現が重複していること、420 番から 425 番に番号が跳んでいること、477

番が欠番になっていることも考慮に入れなければならないからである。また、「シベリア・ノート」の体裁は便箋を28枚綴じた手製のノートであるが、ちょうど裏表紙にあたるところに、О бродягах, фальшивые деньги, мужики убивают их.⁽²⁾ という書きつけが認められ、これを単なる落書きではなく、「シベリア・ノート」の書きつけの一つと見なすとする、結局、 $486-1+1-4-1+1=482$ となり、この482個というのが、「シベリア・ノート」の実質的な記載事項数である。⁽³⁾

§3 監獄フォークロアとしての「シベリア・ノート」

19世紀半ばの監獄フォークロアは「シベリア・ノート」の中に十分反映されており、民俗学者のみならず、ドストエフスキイを愛する現代の読者の関心をも惹いている。科学アカデミー版ドストエフスキイ30巻全集（以下「30巻全集」と略称する）の注釈者は、「シベリア・ノート」が監獄における民衆の言葉の最初の書きつけであること、そしてその監獄フォークロアの資料としての正確さは疑う余地のないものであることを指摘している。⁽⁴⁾ 「ノート」の482個の書きつけは、その具体的内容として、慣用句、諺、⁽⁵⁾ 監獄伝説の断章、アネクドート、歌、⁽⁶⁾ 会話の断片、ユーモラスな表現などから成り立っている。

「シベリア・ノート」には、ポーランド、ウクライナ、ユダヤ、タタール諸語の表現や、ウラル・シベリア方言に属する表現も含まれており、⁽⁷⁾ フォークロア研究の立場からも貴重な資料となっている。

§4 「シベリア・ノート」におけるジャルゴン

ここでジャルゴン（特定の社会集団においてのみ通用する用語）、いわゆる隠語の問題について少し言及したい。ドストエフスキイは監獄にいた間、囚人用語や泥棒用語に多大な関心を寄せたようで、実際に「シベリア・ノート」の中に、彼の興味を引いた表現のいくつかを書きとめている。そのような例として、31, 38 (53), 39, 44, 56, 76, 90, 127, 167, 174, 188, 205番の表現などを挙げることができる。例えば前に触れた38 (53) 番の Переменил участь. という表現は、逃亡を意味する囚人用語であったし、205番に Смотрим, идут две суфлеры. とあるが、ここで用いられている суфлера というのは売春婦を意味する典型的な囚人用語である。

§5 30巻全集所収テキストの問題点

次に、30巻全集第4巻に掲載されている「シベリア・ノート」のテキストとしての問題点について若干言及しておきたい。

まず第一に、いくつかの書きつけに誤りのあることが指摘される。例えば、これは30巻全集第30巻第2分冊の正誤表の中ですでに訂正されている例である⁽⁸⁾が、101番に Чисто ходишь, бело носишь, скажи, кого любишь? С каким словом сказать.⁽⁹⁾ とあるのに対し、実際のオリジナルのテキストには、С киксом, словом сказать. と記されていて、「ずいぶんと気取っているんだねえ」という意味になる。⁽¹⁰⁾

第二の問題点は、いわゆる卑猥語や罵倒語などの検閲にひっかかる、活字にはいけない言葉にかかわる問題である。「シベリア・ノート」では、90, 217, 471番においてそのような言葉が用いられ、30巻全集ではそれらはすべて伏字になっている。オリジナルのテキストにおいても、ドストエフスキイはこれらの言葉をはっきりと書いてはおらず、その頭文字だけとか、最初の一字ないし二字のみを記しているだけである。217番を見てみよう。30巻全集第4巻のテキストでは、№ №) Ишь, толстая рожа, в три дня не <…>. となっていて、не の後は完全な伏字となっている。オリジナルのテキストにおいても、この部分には単に об ... と記されているだけであるが、これは排泄行為を意味する動詞 обкакать の接頭辞であろう。したがって文全体の意味は、「三日じゃあお前の面をクソで汚せやしないだろうさ（それほどお前の面は太っている）」となると思われる。⁽¹¹⁾

第三の問題点は、30巻全集第4巻所収のテキストのいくつかの書きつけに、判読不能個所があったということである。これらの多くは30巻全集第30巻第2分冊の正誤表において明らかにされている。⁽¹²⁾ 筆者自身、「シベリア・ノート」のオリジナルのテキストを見た経験から、アンナ夫人による筆者版テキストをも参考にしつつ、30巻全集のテキストに対する正誤表を作製し、昨年（1992年）秋に行われた日本ロシア文学会の研究報告会においてそれを資料として提出した。

§6 「シベリア・ノート」と『死の家の記録』

「シベリア・ノート」に由来する表現は、『死の家の記録』を始め、ドストエフスキイのさまざまな作品、例えば『スチェパンチコヴォ村とその住人』、『虐げられた人々』、『地下室の手記』、60年代以降のいわゆる五大長編などにお

いても用いられている。また、小説のみならず、ドストエフスキイが書いた評論の中にも、「シベリア・ノート」の表現をいくつか見つけることができる。

さて、ここで、「シベリア・ノート」の表現が作品中で用いられている様子を、『死の家の記録』を取り上げて考察してみたい。

まず明らかにしておきたいのは、「シベリア・ノート」の実質482個の書きつけのうち、いくつか『死の家の記録』の中で利用されているかという数量的問題である。В. П. Владимирцев и Т. И. Орнатская, «Моя тетрадка каторжная» (「シベリア・ノート」の注釈書), 30巻全集第4巻の注, 染谷茂氏や小沼文彦氏による「シベリア・ノート」の翻訳⁽¹³⁾に付された注を参照し, さらに筆者自身が見つけたものを加えて, 現時点で241個の表現が『死の家の記録』で用いられていることが明らかになっている。

なお, この「241」という数字には重複して用いられているものは含まれていない。つまり, 「シベリア・ノート」の一つの表現が『死の家の記録』の中で二個所以上で別個に用いられている場合でも, 一つとして計算されている。また, これとは逆のケース, 即ち「シベリア・ノート」の二つ以上の表現が作品中で一個所に結合されている場合もあって, 両者は必ずしも一対一の対応をしていない。

筆者はこれら241個の書きつけのすべてに対し, それらが作品テキストの中でどのように変形されて(あるいは変形されないで)用いられているかを調べてみた。その際, それら変形の態様を分析することは, 『死の家の記録』という作品をより深く理解するのに役立つという考えから, 変形の程度に応じてA～Dの分類記号を用い, 以下のように四つの範疇に分類した。

[A] 当該表現が一つの単語や句のレベルで用いられているもの。しばしば引用符つきで用いられる。(37個)

具体例 (「シベリア・ノート」の書きつけの後, **印以下に当該表現が利用されている『死の家の記録』中の該当箇所を示す。以下同様)

3) А вам спасибо за то, что меня наблюдаете.

** Насилу я утешил его, и хоть он с этих пор, если возможно это, еще усерднее начал служить мне и «наблюдать меня», но ...⁽¹⁴⁾

[B] 当該表現が全く変形されずに用いられているか, あるいは極めて軽微な程度の変形にとどまるもの。(63個)

具体例

163) Хоть без ребрушка ходить, да солдатику любить.

** Хоть без ребрушка ходить, да солдатику любить!⁽¹⁵⁾

[C] 当該表現が変形を施されて用いられているが、その変形の背後に作家の意図が反映しているほどではないもの。(122個)

具体例

201) Ну, моя пусть рябая, нехорошая, зато у ней сколько одежды.

** «Моя пусть рябая, нехорошая, да зато у ней сколько одежды; ...»⁽¹⁶⁾

[D] 当該表現が著しい変形を施されて用いられているか、あるいは変形の背後に作家の意図が反映しているもの。(19個)

具体例

400) «Ну, и я там писал». — «А теперь что не пишешь?» — «А вот как перьями начали писать, так уж я и отстал».

** — А ты разве умеешь писать?

— Прежде умел, а вот как перьями стали писать, так уж я и разучился...⁽¹⁷⁾

[A] に分類したものは、ドストエフスキイがオムスクやセミパラチンスクで耳にし、興味を覚えた表現を単語や句のレベルで用いたものであるから、当該表現の前後が小説テキストの中で異なっているのは当然であり、一応「変形」の問題とは切り離して考えることとする。[B] に分類した「63個」という数字は、変形が施されている「141個」([C] と [D] の合計) に比べて半分以下であり、やはり「少ない」と評価するのが妥当であると思われる。つまり、ドストエフスキイは『死の家の記録』の中で、「シベリア・ノート」起源の表現を多数用いているのであるが、そのうち三分の二以上の表現には何らかの変形を施して用いていると言うことができる。

ところで、『死の家の記録』に描かれている会話（主として囚人たちの会話）は、「シベリア・ノート」起源の表現を基にしているものと、そうでないものとに分けたとすると、両者はかなりくっきりと分離されて用いられていることに気づく。つまり、「シベリア・ノート」に由来する表現は短頁のうちに連続的に（即ち一定の描写の中で集中的に）用いられる一方、それらが用いられていない描写では全く出て来ないという傾向が顕著なのである。そのような個所の具体例として、30巻全集第4巻24頁を引用する（「シベリア・ノート」の表現が利用されている個所を下線で示し、その後に当該表現の番号を括弧内に付す）。⁽¹⁸⁾

— Подлец ты, а не каган! (90) — заревел толстяк, почувствовав, что

срезался на всех пунктах, и дойдя до крайнего бешенства.

<...>

— Да, держи, подерутся! — раздалось в ответ. — У нас народ бойкий, задорный; семеро одного не боимся ... (13)

— Да и оба хороши! Один за фунт хлеба в острог пришел, а другой — крыночная блудница, у бабы простокишу поел, за то и кнута хватил. (68)

<...>

— Вода, ребята! Невалид Петрович проснулся! Невалиду Петровичу, родимому братцу! (184)

— Брат ... Какой я тебе брат? Рубля вместе не пропили, а брат! (267) — ворчал инвалид, натягивая в рукава шинель ...

<...>

— Старичку Антонычу хлеб да соль, здравствуй! — проговорил молодой арестант, усаживаясь подле нахмуренного и беззубого арестанта.

— Ну, здравствуй, коли не шутишь, (196) — проговорил тот, не поднимая глаз и стараясь ужевать хлеб своими беззубыми деснами.

— А ведь я, Антоныч, думал, что ты помер; право-ну.

— Нет, ты сперва помри, а я после ... (235)

<...>

— У меня небось не украдут, — говорил один, — я, брат, сам боюсь, как бы чего не украсть. (16)

— Ну, да и меня голой рукой не бери: обожгу. (139)

— Да чего обожжешь-то! Такой же варнак (39); больше и названья нам нет ... она тебя оберет, да и не поклонится. Тут, брат, и моя копеечка умылась. (212) Намедни сама пришла. Куда с ней деться? Начал проситься к Федьке-палачу: у него еще в форштадте дом стоял, у Соломонки-паршивого, у жида, купил, вот еще который потом удавился ... (113)

ここでは 90, 13, 68 番など 12 個の表現が次々につなぎ合わされて、囚人たちの会話を構成している。しかし、これらの表現は、ドストエフスキイがオムスクの監獄で実際に耳にしたときは、一つ一つが独立した別個のものであったはずであり、それぞれの表現がそれにふさわしい状況の中で囚人たちによって

語られていたに違いない。それが次々につなぎ合わされているために、いささか不自然な、即ち実際にはありそうもない会話の描写になっている。⁽¹⁹⁾「シベリア・ノート」の表現を作品中の描写で利用しようとする場合、その適用の分布がある程度アンバランスになるのは、むしろ自然なことであるが、ところどころに、「ノート」の表現を作品中でできるだけ多く利用しようといったドストエフスキ自身意図がうかがわれ、このことは注目に値するであろう。

もう一つの特徴的な現象は、『死の家の記録』に用いられている「シベリア・ノート」の表現の各々の主体、即ち誰の言葉として描写されているか、という問題とかかわってくる。まず気づくのは、小説の語り手であるゴリャンチコフが「シベリア・ノート」起源の表現の主体となっている例は、3, 44, 89, 228, 387 番の 5 個所に過ぎず、ゴリャンチコフには「ノート」の表現がほとんど分け与えられていないということである。圧倒的大多数は囚人の言葉として描かれているのであるが、もう少し詳しく見てみよう。

まず、主体が不特定多数の囚人となっている表現の例は、2, 5, 11, 35, 38 (53), 59, 108, 118, 169, 205, 282, 319, 436, 443, 460 番で、15 個ある。

次に、特定の囚人ではあるが、小説中で名前を与えられていない囚人が主体となっている表現の例は、4, 7, 9, 13, 15, 16, 17, 23, 37, 39, 46, 61, 62, 64, 65, 66, 67, 68, 70, 71, 75, 85, 86, 87, 90, 97, 103, 111, 113, 115, 132, 137, 139, 142, 144, 153, 155, 159, 164, 172, 175, 177, 183, 184, 192, 193, 198, 200, 206, 211, 212, 213, 216, 225, 232, 233, 239, 243, 245, 246, 248, 249, 253, 257, 263, 267, 277, 295, 308, 310, 311, 316, 318, 331, 332, 339, 342, 343, 345, 346, 354, 366, 370, 371, 373, 387, 389, 405, 406, 408, 411, 412, 419, 435, 438, 446, 450, 453, 454, 461, 462, 464, 469, 470, 480, 481, 486 番の計 107 個もあり、非常に多い。

そして名前が与えられている囚人が主体となっている表現の例は、次の通りである。

Скуратов ……………6, 36, 42, 43, 50, 128, 134, 136, 188, 215, 218, 232, 240, 241, 355, 407, 430.

Лука Кузьмич…………12, 36, 40, 45, 91, 92, 133, 134, 230, 301, 467.

Шапкин……………52, 112, 119, 138, 148, 158, 181, 229, 400.

Варламов……………26, 79, 123, 131, 176, 215, 306, 320.

Устьянцев……………278, 292, 299, 314, 315.

Исай Фомич……………91, 92, 202.

Степка	221, 325, 334.
Сироткин	58, 194.
Антоныч	196, 235.
Чекунов.....	287, 333.
Булкин	303, 335.
Савельев	348, 435.
Вася	41.
Онуфриев	201.
Куликов.....	318.
Александр.....	434.
Баклушин	436. ^[20]

ここで興味深いのは、物語の語り手であるゴリャンチコフを始め、小説中で中心的な存在となっている囚人たち、例えばアキム・アキムイチ、ペトロフといった主要人物の描写には、「シベリア・ノート」起源の表現はほとんど利用されていないということである。スクラートフとルカ・クジミーチがわずかに例外と言えるものの、イサイ・フォミーチの3個所、シロートキンの2個所、クリコフの1個所などは決して多くはない。換言すれば、「シベリア・ノート」に由来する表現の主体として、その圧倒的大多数を占めているのは、不特定多数の囚人か、小説中で名前を与えられていない囚人か、名前は与えられていても端役的な役割を演じているに過ぎぬ囚人たちであると言える。

以上の事実—即ち①「シベリア・ノート」の表現が作品中で利用されるとき、その多くは変形されて用いられていること、②特定の会話の描写の中で「ノート」の表現が集中的に用いられていること、③「ノート」の表現の主体は小説中の主要人物ではなく、端役的な囚人たちであること—は、『死の家の記録』という作品が、少なくともドストエフスキイが監獄における自己の体験をそのままの形で再現しようとしたドキュメンタリー小説ではなく、むしろ創作色の濃い芸術作品であることを語っているように思われる。

いずれにせよ、「シベリア・ノート」の482個の書きつけは、ドストエフスキイの文学を理解するための、さまざまなヒントを与えてくれる貴重な資料であり、我が国でも多くの読者や研究者の関心がそれに注がれることを期待して、本稿の結びとしたい。

- 注(1) 日付が付記されているのは、387（7月5日）、398（8月28日）、429（3月20日）、435（5月8日）、442（8月17日）、450（1856年9月26日）、453（10月17日）、459（1856年12月19日）、469（5月11日）、486番（1860年9月6日）の計10個所である。年号が記載されているのは、450、459、486番の3個所のみであるが、後ろから逆算してゆくと、429番以降は1856年に、387番と398番は1855年に書かれたものと推定される。なお、459番の書きつけには、実際には「46」という数字が記されているが、これは年号と解釈する他はなく、ドストエフスキ自身に犯した書き間違いと思われる。このことは30巻全集の注釈者も指摘している。30巻全集第4巻310頁参照。
- (2) их が фальшивые деньги を指し、「浮浪人について。贋金。百姓どもがそれを浪費する」の意になると思われるが、их が бродяги を受けると解すると、「百姓どもが彼ら（浮浪人）を殺害する」という解釈も可能である。
- (3) 筆者は一昨年（1991年）6月に、モスクワにあるレーニン図書館にて、マイクロフィルムという不完全な形ではあるが、「シベリア・ノート」のオリジナルのテキストを見る機会を得、375番の重複、477番の欠番など、すべてこの通りになっていることを確認することができた。30巻全集第4巻、『死の家の記録』に付された注の論文の中に、「シベリア・ノート」の記載事項数は522であるとの記述があるが、これは誤りである。30巻全集第4巻275頁参照。
- (4) その根拠として、有名なフォークロア集に文字通り一致した表現や近接ヴァリアントの存在することが指摘されているが、同時に、近接ヴァリアントの存在していない（あるいは見つかっていない）表現が「シベリア・ノート」に含まれていることにも注目する必要があるだろう。そのような表現の例としては、1, 43, 65, 77, 84, 187, 198, 332, 338, 381, 456番などを挙げることができる。30巻全集第4巻311頁参照。
- (5) 慣用句、諺は非常に多く書き留められている。2, 5, 8, 13, 22, 27, 37, 72, 88, 93, 95, 99, 104, 121, 122, 123, 124, 138, 140, 141, 145, 148, 154, 171, 176, 179, 197, 207, 234, 247, 256, 257, 259, 260, 263, 281, 282, 283, 290, 294, 315, 329, 339, 345, 347, 349, 366, 381, 389, 412, 413, 417, 442, 450, 452, 455, 458, 464, 468, 470, 472, 479番など。30巻全集の注釈者は、これら「シベリア・ノート」の諺と、ウラジーミル・ダーリの『ロシア民衆の諺』に収録されている諺との異同について指摘しているが、両者の表現が全く同一であるというケースはほとんど皆無である。
- (6) 30巻全集の注釈者は、「シベリア・ノート」の中に歌のテキストが少ないことを指摘しているが（30巻全集第4巻311頁参照）、実際には、歌のテキスト、舞蹈歌や叙情歌の歌詞の一節が12個所ほど見出され、そのように断定することはできないと思われる。具体的には、77, 100, 101, 161, 163, 214, 215, 218, 224, 277, 295, 454番が歌のテキストとして挙げられるが、このうち、100, 101, 163, 214, 215, 218, 224, 277, 295番の9個が『死の家の記録』で用いられている。しかも、215, 277, 295番の3個は、完全な歌のテキストとして、ほとんどそのままの形で

- 引用されていることから考えて、監獄の中で囚人たちによって歌われていた歌に、ドストエフスキイは大きな関心を寄せていたとすることができるであろう。
- (7) このような非ロシア語的表現や訛ないし方言が数多く書き留められていることは注目に値する。8, 30, 51, 91, 182, 183, 185, 252 番はウクライナ訛のロシア語で書かれているし、136番はウクライナ人をからかう時に用いる決まり文句である。ウラル・シベリア方言に属すると思われる表現としては、28, 39, 41, 58, 85, 125, 153, 162, 170, 200, 219, 226, 239, 241, 274, 280, 371, 382, 409, 458, 478 番を挙げることができる。
- (8) 30巻全集第30巻第2分冊 410 頁参照。
- (9) 30巻全集第4巻 238 頁参照。
- (10) кикс とはビリヤードの用語で、キューで球を突いたときの「突き損ない」の意であるが、ここでは反語的な意味で用いられている。В. П. Владимирцев и Т. А. Орнатская, *Моя тетрадка каторжная (Сибирская тетрадь)*, Красноярск, 1985, стр. 77.
- 因みに、筆者はやはり一昨年6月に、レニングラード、現在のサンクト・ペテルブルグにある科学アカデミー付属ロシア文学研究所、通称プーシキン館に保管されているアンナ夫人による「シベリア・ノート」の筆写版テキストを見ることができたが、ここでも С киксом, словом сказать. と書かれてあった。
- (11) 因みに90番の伏字部分には、е. т. м. (有名な罵倒語の頭文字) と、471番には、ж. (尻の穴を意味する жопа の最初の一字) と、それぞれ記されている。
- (12) 例えば364, 387, 398, 429, 435, 486番の判読不能箇所には、Еheu という言葉が記されていたとなっている。これはロシア語の《увы》に相当するラテン語の間投詞で、日記につける伝統的な注記とのことである。В. П. Владимирцев и Т. А. Орнатская, *Моя тетрадка каторжная (Сибирская тетрадь)*, стр. 51-56, 97.
- (13) 染谷茂氏の翻訳は新潮社版ドストエフスキー全集第26巻に、小沼文彦氏の翻訳は筑摩書房刊ドストエフスキー全集第19巻Bに、それぞれ収録されている。
- (14) наблюдать という動詞が「世話をする」という特殊な意味で用いられているのが面白く、ドストエフスキイはこの表現を「ノート」に書きとめたのであろう。これを『死の家の記録』では、単語のレベルで引用符つきで用いている。このような例は、3, 12, 26, 35, 38 (53), 39, 45, 71, 75, 89, 112, 118, 137, 138, 184, 205, 286, 301, 305, 310, 318, 319, 320, 330, 331, 334, 335, 371, 387, 396, 408, 430, 434, 436, 438, 445, 486番。
- (15) ピリオドが感嘆符になっているだけで、「シベリア・ノート」の表現がそのままの形で『死の家の記録』において用いられている。このような例は、6, 13, 16, 33, 44, 62, 82, 85, 100, 101, 111, 113, 129, 134, 144, 148, 158, 163, 172, 177, 188, 196, 200, 214, 218, 221, 228, 230, 233, 239, 240, 243, 245, 246, 257, 263, 264, 267, 277, 282, 295, 299, 308, 311, 329, 339, 348, 354, 373, 380, 389, 406, 410, 411, 435, 446, 450, 458, 459, 464, 470, 480, 482番。

- (16) Ну が落ち, да がつけ加えられており, 変形はされているが, 別にその背後に作家の意図が反映しているほどでもない。このような例は, 2, 4, 5, 7, 9, 11, 15, 17, 23, 25, 28, 32, 36, 37, 41, 42, 43, 46, 50, 59, 61, 64, 65, 66, 67, 68, 70, 74, 79, 83, 86, 87, 90, 97, 103, 108, 115, 116, 117, 119, 123, 128, 131, 132, 133, 136, 139, 142, 153, 155, 159, 164, 169, 175, 176, 178, 183, 192, 193, 194, 198, 201, 206, 211, 212, 213, 215, 216, 217, 225, 226, 229, 232, 235, 248, 249, 253, 262, 265, 266, 273, 278, 285, 287, 292, 298, 303, 306, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 325, 326, 332, 333, 342, 343, 346, 355, 366, 370, 386, 403, 405, 407, 409, 418, 419, 443, 453, 454, 456, 460, 461, 466, 467, 475, 481, 485番。
- (17) 「書かないのか?」という質問が「書けるのか?」に変えられている。また, Прежде умел がつけ加えられている。さらに, начали が стали に, отстал (自分の意思でやめた) が разучился (忘れてできなくなった) に, それぞれ変形されている。これらは, ドストエフスキイによる意図的な変形と考えられる。このような例は, 40, 48, 52, 55, 56, 58, 91, 92, 105, 180, 181, 202, 224, 241, 345, 400, 412, 462, 469番。
- (18) 同様の例は, 例えば30巻全集第4巻71頁や168頁にも見ることができる。
- (19) 184番の表現に родимый братец という言葉をつけ加えて, 267番の Какой я тебе брат? に橋渡ししている点, 16番と139番の論理的脈絡の欠如したやり取りなどは, その具体例と言える。
- (20) 一部重複しているところがあるのは, 一つの表現が二人以上の主体による会話として描かれていたり, 小説中の異なる個所で別個の描写として利用されていたりするケースがあるからである。なお, 第2部第4章「アクーリカの亭主」は, それ自体一つの短編として鑑賞し得る内容を備えており, そこで用いられている「シベリア・ノート」起源の表現は, ここでの考察からは除外した。

〈Сибирская тетрадь〉 и «Записки из Мертвого дома»

Кэнсин МАЦУМОТО

Ф. М. Достоевский начал записывать 〈Сибирскую тетрадь〉 предположительно в 1852–53 годах. 〈Сибирская тетрадь〉 имеет исключительную важность не только для фольклористики, но и для того, чтобы постигать произведения Достоевского, в особенности «Записки из Мертвого дома».

В общем в 〈Сибирской тетради〉 очень полно отражен фольклор тюрьмы середины 19-го века, представляющий большой интерес для фольклористов. Эти записи подлинного тюремного и народного языков предше-

ствуют ряду появившихся в конце 19-го века этнографических и лингвистических исследований тюремного быта и фольклора. Объем <Сибирской тетради> — 482 записи, которые состоят из поговорок, пословиц, отрывков тюремных легенд, анекдотов и песен, обрывков разговоров, отдельных метких выражений, как будто только что сорвавшихся с языка.

Взявшись за изучение тюремного жаргона, Достоевский открыл новое направление в литературе. Он впервые в истории литературы показал, что тюремный мир также имеет свою культуру, свой язык, свою психологию, заслуживающие детального изучения. Ведь зачастую, тюремные слова и выражения, употребленные в литературном произведении, так ярко передают эмоциональный оттенок, что невозможно представить себе более благопристойную замену. Подобную же роль играют украинский язык и урал-сибирский говор.

Впоследствии немало записей из <Сибирской тетради> употреблялись Достоевским во многих произведениях. Анализ писательских приемов употребления этих записей должен дать нам очень интересные результаты для выяснения особенностей литературы Достоевского:

1) В «Записках из Мертвого дома» употребляются 241 запись из <Сибирской тетради> и больше 2/3 записей из них видоизменены в разных степенях. 2) В тексте «Записок из Мертвого дома» выражения из <Сибирской тетради> распределены неравномерно — на некоторых страницах они изобилуют, а на других мы можем не встретить ни одного. 3) Стоит обратить внимание на то, что материалы из «Записок из Мертвого дома» Достоевский вложил в уста не главных героев романа, а второстепенных персонажей. Эти три факта позволяют сделать вывод, что «Записки из Мертвого дома» представляют собой скорее художественное, чем документальное произведение.